

日本における昔話絵本「三びきのこぶた」の起点と変遷(第1報)

—描かれた「三びきのこぶた」—

村田 あゆみ

Study of “The Story of the Three Little Pigs” in Japan (I) The First Picturebook of This Story

Ayumi MURATA

はじめに

イギリス昔話「三びきのこぶた」は学生たちが保育活動において、ペープサートや手遊び等最もよく取り上げる題材である。この昔話を知らない学生はないといっても過言ではない。

「三びきのこぶた」が保育現場に浸透したのはいつの頃なのであろうか。そもそもこの昔話が日本に紹介されたのはいつ、そして絵本化されたのはいつであらうか。

昔話「三びきのこぶた」の日本への受容の歴史について筆者は既に日本昔話学会2016年度大会¹において口頭発表を行い、現在論文作成中である。本稿では、絵本化された「三びきのこぶた」の起点を調査し、その概要を明らかにすることが目的である。したがって昔話の内容の変遷については本稿では取り扱わない。

ところで戦後はじめて文部省が幼児教育の手びきとして作成した「保育要領」(1948年)は、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の前身となるものであるが、ここには「六 幼児の保育内容—楽しい幼児の経験—」という項目があり、具体的な内容が12項目にわたり示されている。その中の10. ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居の項目の劇遊び(お話し遊び)は以下のように書かれている。「三びきのこぶた」が例として挙げられている。

劇遊び(お話し遊び)

(前略)幼児は童話を聞くとそれを遊びにしてみたいと考えるものである。たとえば、三匹の子ぶたの話を知ると、これを直ちに遊びにする。大きい男の子はおおかみになり、小さい子はそれぞれ三匹の子ぶたになって、話で聞いた筋を興味深く再現しようとする(後略)² (下線部は筆者による)

このように既に、「三びきのこぶた」が保育の場において馴染みの昔話となっていたことが推察できる。それでは、当時の幼児はどのような形で、つまりどんなメディアを通して「三びきのこぶた」を知っていたのであろうか。

昭和の初期に誕生した街頭紙芝居は子どもたちの心をひきつけたが、一方で俗悪であるとの批判を受けていた。高橋五山はそこで教育紙芝居(保育紙芝居ともいう)と呼ばれる印刷型の紙芝居を出版し、幼稚園への浸透を図った。結果、多くの幼稚園で受け入れられるようになった。高橋が刊行した「幼稚園紙芝居」全10編の中に「三びきのこぶた」が含まれており、幼稚

園での活用を通して幼児の知るところとなっていたのではないかと思われる。さらに五山の後継者ともいえる川崎大治もこの昔話の紙芝居を出版している。

では紙芝居以前、「三びきのこぶた」はどのような形で子どもに伝えられていたのだろうか。本稿では、昔話絵本としての「三びきのこぶた」の起点を調査し、その変遷を明らかにする。

1. イギリスの昔話「三びきのこぶた」とディズニーアニメ

現在流布している「三びきのこぶた」は、19世紀イギリスのジェイムズ・オーチャード・ハリウエル (James Orchard Halliwell) がまとめた私家版『イングランドの伝承童謡』(*Nursery Rhymes of England*, 1842) に収められた「三びきのこぶたの話」(The story of the Three Little Pigs) にさかのぼる。これをジョセフ・ジェイコブズ (Joseph Jacobs) が『イギリス童話集』(*English Fairy Tales*, 1890) にはほぼそのまま収録し、広く知られるに至った。また同時期にはアンドリュー・ラング (Andrew Lang) も再話を手掛けて「三びきのこぶた」(The Three Little Pigs) を『緑色の童話集』(*The Green Fairy Book*, 1892) に収録しており、異なる話があることも知られている。ジェイコブズやラングは、その再話姿勢は異なるものの、両者とも子どもを読者対象とすることを強く意識している。また、レズリー・ブルック (Leslie Brooke) の『金のガチョウの本』(*The Golden Goose Book*, 1905) はジェイコブズの昔話の挿し絵本として現在も広く知られている。

この他、現在流布している「三びきのこぶた」にディズニーの短編アニメーション映画がある。ウォルト・ディズニーは、1920年代後半より、短編のアニメーション作品を発表し始めたが、「シリー・シンフォニー」シリーズの一つとして1933年に「三びきのこぶた」(Three Little Pigs) を制作し、これはアカデミー賞短編アニメーション部門を受賞した。「おおかみなんかこわくない」という挿入歌が大ヒットし、今でも多くの人に知られている。

ここで簡単にそれぞれの「三びきのこぶた」の梗概を示しておく。

(1) ジェイコブズ「三びきのこぶたのお話」The Story of the Three Little Pigs

雌豚に3匹の子豚がいたが、養いきれなくなってそれぞれ自活していくように告げる。最初の子豚はわらで家を建てるが、狼に家を吹き飛ばされ食べられてしまう。次の子豚はハリエニシダで家を建てるが、狼に家を吹き飛ばされ食べられてしまう。3番目の子豚はレンガで家を建てる。狼が吹き飛ばそうとするが飛ばされない。狼はカブ畑にカブを取りに行こうと誘うが失敗する。次にリンゴを取りに行こうと誘うが再び失敗する。最後に狼は市にでかけようと誘うがこれも失敗する。そこで狼は怒って煙突から入ってくるが、子豚は鍋に湯を沸かし、狼が落ちるとすかさずふたをして狼を食べてしまった。

(2) ラング「三びきのこぶた」The Three Little Pigs

ある農場に母豚と3匹の子豚が暮らしていた。1番上のブラウニーは泥の中を転げまわり、2番目のメスのホワイトティは食いしん坊、末のブラッキーは清潔で賢い子ブタであった。母豚は死期を前にして子豚に家を建ててやる。それぞれ希望通り、泥の家、キャベツの家、レンガの家ができあがる。そこへ狐がやってきて家を壊し、ブラウニーとホワイトティを巣穴に連れて行ってしまいが、ブラッキーのレンガの家は壊すことができない。翌日ブラッキーは町でやか

んを買ってくる。帰り道に狐に遭遇するが機転を利かして逃げ延びる。怒った狐は煙突から入ってくるが、子豚はやかんに湯を沸かし、狐を殺してしまう。その後ブラッキーは巣穴から兄妹を救出する。

（3）ディズニー「三びきのこぶた」 Three Little Pigs

3匹の子豚がそれぞれわら、木の枝、レンガで家を建てる。最初の2匹が笛やヴァイオリンを奏でながら踊っているとぼろぼろの身なりの狼が現れてわらの家と木の家を吹き飛ばしてしまう。2匹はレンガの家に逃げ込む。煙突から入ってきた狼は大やけどをして逃げていく。狼を追いだした3匹の子豚は音楽を奏でダンスを踊る。

この他、フランスには民話カタログに掲載された口承の昔話が存在するが³、ジェイコブズ、ラング、そしてディズニーが「子どもを読者対象として」再話再創造を行った結果、それらが世界中に普及することとなったのである。ジェイコブズのテキストは、ハリウエルのテキストを踏襲しているが、童話集の前書きにおいて、ばあやが昔話を話すような口調で、子どもに読めるように、音読されることを意図して書いたと述べ⁴、口承である昔話の形式を意識していたと思われる。一方ラングの再話は、子豚たちの性格や感情表現が盛り込まれ、また状況の説明なども詳しく語られている。賢く身ぎれいにしておかなければ狐につかまってしまう、というような教訓的意図をも明らかに含んでおり、再話というより「読物」としての翻案作品である。ディズニーのアニメも同様で、昔話の形式を全く解体し、子豚と狼のやり取りを軽妙に描き、音楽を盛り込んだ作品に仕立て上げている。

2. 日本における「三びきのこぶた」の受容の歴史～絵本の出現まで

本章では、絵本が現れるまでの昔話「三びきのこぶた」の受容について述べる。

昔話としての「三びきのこぶた」の日本における最初の翻訳は、1908（明治41）年春陽堂より発行された『家庭お伽話』第13編に収められた吉岡向陽の「豚の兄弟（西洋の話）」であると考えられる⁵。

これはアンドリュー・ラングの再話に依るものである。吉岡向陽は国定教科書の編纂に当たっていた人物であるが、この叢書は巖谷小波の「世界お伽話」全100巻の対抗企画として刊行された全50巻の叢書である。1冊に西洋の話と日本の話の2話を取る構成となっている⁶。本編は、西洋の話として「豚の兄弟」、日本の話として「牛の報恩」が掲載されている。ラングの『緑色の童話集』のほぼ全訳である。『緑色の童話集』にはフォード（H.J.Ford）による3枚の挿絵が添えられているが、煮えたぎるやかんに蓋をする子豚の挿絵と本書の鯨崎英朋の口絵には類似が認められ（図①②）、鯨崎はこの構図を模倣していると思われる。鯨崎は、日本で最初の単行絵本叢書とされる「お伽画帖」（博文館、明治41年より刊行、全24冊）、芸術的なミニチュア絵本シリーズとして知られる「日本一ノ画噺」（中西屋書店、明治44年より刊行、全36冊）の挿絵も担当し、文部省図書課の嘱託として教科書の挿絵も手掛けていた人物である。



図① 『家庭お伽話』 鯨崎英
朋絵
大阪府立中央図書館国際児童文学館
所蔵



図②
『緑色の童話集』 フォード絵

続けて明治期には稲村露園による1910(明治43)年の『学校家庭講話資料 世界名作お伽噺』所収の「三匹の豚イギリス」がある。これはジェイコブズの再話を元としている。挿絵は村上菱山(李王世子殿下御用係)であると思われる⁷(図③)。

以上2点が明治期における日本の「三びきのこぶた」である。

続いて大正期には、雑誌の中で紹介されている。

1914(大正3)年、羽仁吉一・もと子夫妻により創刊された雑誌「子供之友」(第1巻第5号)に「三匹の小豚」と題し、6ページにわたる絵入りの童話として掲載された⁸。ジェイコブズの再話を元にしなが、子豚は狼の巣穴に連れて行かれて最後に救出されるなど、ラングのモチーフが取り入れられている。また、結末は狼は生け捕りにされ猟師に連れていかれるといった改変を行っているが、羽仁らはレズリー・ブルックの挿し絵本を参照していたと思われる。図④のタイトル周辺の小豚が後ろ足で立っている様子、大きなわら束を背負っている挿絵は図⑤⑥のブルックの絵との共通点が認められよう。



図③
『世界名作お伽噺』 村上菱山絵
大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵



図④ 「子供之友」
東京都立多摩図書館所蔵



図⑤図⑥
レズリー・ブルックによる挿絵

大正期を代表する児童文芸雑誌「赤い鳥」第1巻第6号（1918（大正7）. 12）において鈴木三重吉が「三匹の小豚（童話）」を見開き3段組みで掲載している。中段にカットが挿入されている（図⑦）。再話はラングのものであるが、童話として再構成されたものとなっている。



図⑦ 「赤い鳥」1巻6号

昭和に入ると、まず1927（昭和2）年に菊池寛による『幼年童話集（上）』に「三びきの子ぶた」が収められた⁹。この童話集は、対象を小学1、2年生としており全て平仮名わかち書きで書かれている。ここにはじめてラング版の完訳が現れた。この童話集の挿絵は総勢16名ほどの画家が担当しているが、本話の挿絵を誰が担当したのかは不明である。しかし、キツネがコブタを逆さづりにして巣穴に連れていく場面（図⑧）とフォードの絵（図⑨）との類似は否定できない。



図⑧（左）『幼年童話集（上）』画家不明
東京都立多摩図書館所蔵

図⑨（右） フォード『緑色の童話集』

昭和初期の幼年童話の第一人者として知られる浜田廣介が「三びきのこぶた」を『ひろすけ童話と画の本』日本図書出版部に収めたのは1932（昭和7）年である¹⁰。ジェイコブズ版を元にはいるものの、ほとんどジェイコブズの原型をとどめないほどの改変を行った再創造作品である。文体は七五調で平仮名わかち書きで、幼い子ども（幼児）がイメージをしやすいような表現のくふうが見られる幼年童話である。飯沢天羊の挿絵が3葉添えられている（図⑩）。

この他、昭和初期である1930年代には、幼稚園での上演用として人形劇の脚本¹¹が作られる

など、幼児向けのお話として少しずつ知られるようになってきたようである。



図⑩ 『ひろすけ童話と画の本』

3. 日本における最初の「三びきのこぶた」絵本

(1) ディズニー映画の公開と絵本・紙芝居

ウォルト・ディズニーによるミッキーマウスの最初の短編映画「蒸気船ウィリー」は1928年にアメリカで公開され、翌年には日本の映画館でも公開された。1934～36年にかけては和製のミッキーマング本が多数発行されていたということであるが¹²、「三びきのこぶた」の短編映画が日本で公開されていたかどうかは不明である。しかし、映画の影響を受けたと考えられる「三びきのこぶた」作品が1935年以降出現する。

この章では、絵本あるいは紙芝居となった「三びきのこぶた」を取り上げる。最初に取り上げるのは漫画本として出版されたものである。書誌事項を記す。

書名 トーキー漫画「狼と仔豚」
 著者表記 若林敏郎画、湯浅条策画作
 出版社 春江堂
 出版年 昭和10年(1935)
 頁数 30頁
 サイズ 17.5×18.5cm
 左開き縦書き、片仮名わかち書き
 定価 不明

「トーキー漫画」と書かれているが、コマ割りや吹き出しもなく、一話のみを絵と文で構成している単行本である。原色を主とした見開きの絵と縦書きのテキストで構成されている。テキストの文体は七五調ですべて片仮名わかち書きである。現在の絵本ジャンルとしてはアニメ絵本と呼べるものである。出版社の春江堂は、湯浅条策が創業し、多くの赤本漫画を出している出版社であり、この作品も「漫画」として出版されている。しかしこの時代の漫画と絵本の区別はあいまいであったことを考えても、これを絵本と考えてもよいだろう。大阪国際児童文学館には昭和11年発行の版も存在するので、再版されるほどの売れ行きであったようである。

表紙には帽子をかぶり短い上着を着た2匹の豚が1匹はヴァイオリンを弾き、1匹は横笛を

吹きながら踊っている絵が描かれている。後ろの茂みには狼がいる（図⑪）。

さて、内容は、ブー太郎、ブー吉、ブー助の3匹の仔豚と仔豚を狙う狼が登場する。ブー太郎がレンガで家を作っているところにブー吉とブー助が楽器を片手に遊びに誘いに来る。2匹が遊んでいるとボロ外套を着た狼がやってくる。2匹でわらと木でできた家に逃げ込むが、狼に吹き飛ばされてしまう。2匹はブー太郎のレンガの家へ逃げていく。レンガの家はびくともしない。そこで狼は隣のブタヲバサンの家に侵入する。ブタヲバサンは洋服ダンスに隠れると、狼はヲバサンの服を着込んで仔豚たちを待ち受ける。しかし子豚たちは協力して狼をやっつける。煙突からレンガの家へ侵入した狼は大やけどを負って逃げていく。最後のページには、レンガの家で椅子に腰かけ編み物をするブタヲバサンと横笛、ヴァイオリン、ピアノを奏でる3匹の仔豚が描かれている（図⑫）。

昔話「三びきのこぶた」とはずいぶんかけ離れた内容になっており、狼がおばさんの着物を着こんで化けるところなど、「赤ずきん」を思わせるモチーフまで挿入されているが、若林敏郎の絵は明らかにディズニーアニメを基にしたものである。図⑪⑬⑫は『狼と仔豚』、図⑭⑮⑯は現在発行されているディズニー絵本である¹³。帽子をかぶった仔豚の2匹は上着、1匹はオーバーオールを着ていて、笛やヴァイオリンを奏でる。狼の服はぼろぼろである。狼に吹き飛ばされた家はドアのみが残り、そのドアを仔豚が抑えているという構図や最後にみんなで音楽を奏でる場面もディズニー風である。おそらくは著作権の意識もなく、映画を下敷きに子どもが喜びそうな場面を巧みに取り入れ漫画本として仕立てられたのだと思われる。こうしてジェイコブズでもラングでもないディズニーの「三びきのこぶた」がアニメ絵本として登場したのである。



図⑪ 『狼と仔豚』
大阪府立中央図書館国際児童文学館蔵



図⑫ ディズニー版



図⑬ 『狼と仔豚』
大阪府立中央図書館国際児童文学館蔵



図⑭ ディズニー版



図15 『狼と仔豚』
大阪府立中央図書館国際児童文学館蔵



図16 ディズニー版

さきに述べたように昭和の初期には「三びきのこぶた」の紙芝居が出版された。この紙芝居2点について見てみたい。

題名	三ビキノコブタ (裏面表記は「三匹の仔豚」) 幼稚園紙芝居第七輯 第六回配本 (第1期刊行)
著者表記	監修 濱田廣介 作画高橋五山
出版社	全甲社
出版年	昭和11年 (1936)
枚数	20枚一組
定価	1 円20銭

高橋五山は、1935 (昭和10) 年より「幼稚園紙芝居」シリーズ全10巻を発行するが、この第7編に「三ビキノコブタ (三匹の仔豚)」が収められた。濱田廣介の監修によるストーリーは、ジェイコブズの再話を独自に改変したものである。

仔豚には大豚ちゃん、中豚ちゃん、ちい豚ちゃんと名前がついている。お母さん豚が「もう大きくなったのだから自分で家を建てなさい」と自立を促す。それぞれがわら、小枝、レンガを他者からもらい、家を建てるモチーフはジェイコブズ版に倣っている。しかし大豚ちゃんと中豚ちゃんは家ができると「笛を吹いたりバイオリンをならしたり」しながらちい豚ちゃんを遊びに誘いに行く。「いつもぼろぼろの着物を着ている」「ぼろぼろの狼」がやってきてわらの家と小枝の家を吹き飛ばす。大豚ちゃんと中豚ちゃんはちい豚ちゃんのレンガの家へ逃げていく。狼はリンゴを取りに行こうと仔豚たちを誘うが失敗する。次に市場へ買い物に行こうと誘うが再び失敗する。腹を立てた狼はレンガの家の煙突から侵入する。最後の場面は「狼は火の中へひとりでおちてしまひました」で締めくくられる。

このようにジェイコブズ版を元にしながらも、楽器を奏でたり (図19)、仔豚が狼から逃げだしたりと、随所にディズニーアニメのモチーフが認められる。また五山の絵にも明らかにディズニーアニメの影響が強く認められる。ちい豚ちゃんがレンガを積んでいる構図 (図17) はディズニー版 (図18) と同じであり、吹き飛ばしたドアの枠のみが残る場面 (図20⑭) も同様である。



図17 高橋五山 紙芝居
東京都立多摩図書館所蔵



図18 ディズニー版



図19 高橋五山 紙芝居
東京都立多摩図書館所蔵



図20 高橋五山 紙芝居
東京都立多摩図書館所蔵

もう一つの紙芝居「三ビキノコブタ」（図21）もまたジェイコブズの再話を改変したものであり、22枚のかかなりの長編作品となっている。なお、この川崎の脚本による紙芝居は現在も童心社より出版されている¹⁴。場面数が22場面から12場面へと約半分の場面数となり、それに合わせて文の分量も減った。戦前版には母豚が最後に登場するが、その場面は削除されている。全体の流れ、ストーリー展開に大きな変更は見られない。

題名 三ビキノコブタ 日本紙芝居協会作品
著者表記 脚本 川崎大治 絵画 西正世志
出版社 日本教育畫劇
出版年 昭和18年（1943）
枚数 22枚（挿込2枚）
定価 2円30銭



図21 川崎大治 紙芝居
名古屋柳城短期大学所蔵



図22 川崎大治 紙芝居
名古屋柳城短期大学所蔵

仔豚の名前は大豚ちゃん、中豚ちゃん、ちび豚ちゃんである。お母さん豚が「大きくなったんだから自分でお家を建てなさい」と言う。大豚ちゃんと中豚ちゃんは「お家をたてるのめんどくさい」と歌いながら家を建てる。家の材料はわら、木の枝、レンガである。狼が「どこかにおいしいごちそうはないかなあ」とやってくる。狼に「まで～～」と追いかけられた大豚ちゃんと中豚ちゃんは、ちび豚ちゃんの家へ逃げ込む。狼は煙突から侵入するが、やけどをして「あついよーオ、あついよーオ」と逃げていく(図22)。子豚たちが「ヤイ、狼、今度来たら承知しないぞ!」と追い返すと、そこへお母さん豚がやってくる。子豚たちは「アノネ アノネ」とお母さん豚に狼を追い返した話をして「あーら、まア、それはよかった よかった」とみんな夕食を食べて終わるのである。

子豚たちは幼児そのものとして描かれ、狼もいじめっ子風な描かれ方である。個々のモチーフや西の切り絵風の絵は独自のものであり、ディズニーの影響はあまり見られないが、狼に襲われた子豚が3番目の子豚の家へ逃げていき、煙突から侵入した狼がやけどを負って逃げていくストーリー展開はディズニーのものである。

(2) 戦後の発展—ディズニー絵本と単行絵本

戦後の混乱期を経て「三びきのこぶた」の出版が始まるのは1951(昭和26)年である¹⁵⁾。単行の昔話絵本「三びきのこぶた」の出現は、1951年に出版された2冊が最も早いと思われる。1点は中谷泰の『三びきのこぶた』(図23)でもう1点はディズニー絵本である。

まず中谷泰による「絵本」を取り上げる。書誌事項を記す。

書名 三びきのこぶた 「小学生文庫」82
 著者表記 中谷泰 画
 出版社 小峰書店
 出版年 昭和26年(1951)
 頁数 頁数記載なし
 サイズ 20.5×19cm
 左開き縦書き、平仮名わかち書き
 定価 150円



図23 東京都立多摩図書館所蔵

小峰書店の「小学生文庫」はグレード別で構成され、「国語」「算数」「童話」「伝記」等の教科を中心としたジャンル名が付されている。当時学生であった寺村輝夫¹⁶が編集に関わっていたらしい。『三びきのこぶた』は「童話」「一・二年生向」となっている。平仮名のわかち書きで書かれた七五調の文章の担当者の記載はないが、裏表紙に「さとうよしみ」の署名の詩が掲載されている（図24）ことから、佐藤義美の可能性が高い。佐藤義美は戦前より多くの幼年童話を書き、戦後の童謡運動や幼年童話の分野で活躍した詩人、作家として知られる。童謡「いぬのおまわりさん」は代表作である¹⁷。中谷泰



図24 東京都立多摩図書館所蔵

は洋画家であるが、戦前から児童文学の挿絵を描いたりいわさきちひろと親交があるなど子どもの本の世界においても活躍の場を持った人物であった。

本作品は、昔話「三びきのこぶた」一話のみを絵と文で1冊の本に構成したまさに絵本であり、アニメ絵本ではない最初の本格的な「三びきのこぶた」の絵本と位置付けられる。

この作品の子豚は上着やオーバーオールを着ていたり、楽器を持っていたり等、子豚や狼の描写にディズニーの影響が認められる（図25）。レンガの家を作っている場面の構図も似ている（図26）。

内容は、1匹はなまけもの、1匹はくいしんぼう、1匹は働き者の子豚がそれぞれがわら、やさい、れんがで家を作る。狼がやってきて、わらの家とやさいの家は壊されて2匹はレンガの家へ逃げ込んでくる。狼

は侵入しようと色々試みた挙句、最後に煙突から入ろうとしてやけどを負って逃げていく。最後の場面は「ぼくたち きょうから いいこぶた みんないっしょに はたらくよ はたらこ はたらこ たのしいなあ」という文章に畑仕事に使う道具を担いだ3匹の子豚が並んで野道を歩いていく姿が描かれている。子豚はみんな働き者になったという結末である（図27）。



図25 東京都立多摩図書館所蔵



図26 東京都立多摩図書館所蔵



図27 東京都立多摩図書館所蔵

もう1点のディズニー絵本は、講談社より「ディズニーのまんがえほん」シリーズの1冊として出版された(図28)。書誌事項を記す。

書名 Walt Disney's 三びきのこぶた 「ディズニーのまんがえほん」
 著者表記 なし
 出版社 講談社
 出版年 昭和26年(1951)
 頁数 42頁
 サイズ 20.5×16.5cm
 右開き横書き、平仮名、漢字まじり
 定価 100円

ディズニー絵本は1950年頃より国内での出版が相次いだ。この頃は数多くの出版社が正式に著作権の取得をしないまま出版している。「三びきのこぶた」も講談社以外の出版社の物が見られる。だがこのディズニー絵本には1933年と1948年の著作権が英語と日本語で表記されており、正式に著作権を取得していることが示されている。講談社はその後1964年日本版独占契約を結んでいる¹⁸。原書はアメリカのサイモン・アンド・シャスター社(Simon and Schuster)発行の「リトル・ゴールデン・ブックス」(Little Golden Books)シリーズである。石川晴子によれば、このシリーズは「多数販売による廉価版の絵本¹⁹」で1944年からはディズニー映画の絵本シリーズを出版している。現在はランダムハウスに出版が引き継がれている。1948年のサイモン・アンド・シャスター社版の入手はできなかったのでランダムハウス版²⁰を参照した(図29)。石川によれば、サイモン社の判型は7⁸/₇×6¹/₄インチ(約20×16センチ)、本文は42頁の多色刷りであったということだが、ランダムハウス版はほぼ同サイズで24ページ構成となっている。講談社版は42頁なので、おそらく原書通りの判型、ページ数での出版だったと思われる。ただし、印刷はモノクロとカラーが混在しており、原書通り総ページフルカ



図28 大阪府立中央図書館国際児童文学館蔵

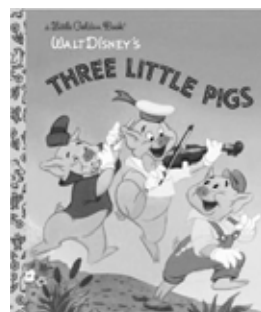


図29 ランダムハウス版

ラーにすることはかなわなかったようである。訳者名は表記されておらず、直訳調でこなれた日本語ではない。

内容は、ディズニー映画のストーリーをなぞっているが、ランダムハウス版の表記によれば絵は映画を元にウォルト・ディズニー・スタジオが作成したものである。

4. 結論とまとめ

調査と検討の結果、絵本となった最初の「三びきのこぶた」は、戦前の昭和10（1935）年、ディズニー映画を下敷きにしたアニメ絵本『狼と仔豚』であったと結論付けたい。もちろん当時はアニメ絵本という呼称もジャンルもなく、「絵本」ではなく「漫画本」として出版されていたと思われる。したがってこれを「最初の絵本」と位置付けるのは、現在の絵本の概念による「絵本」ということになる。だが、一話のみが絵と言葉（文）で構成され、1冊の単行の本としてできているという意味においてこれは絵本に他ならないと考えられる。現在書店の店頭には並ぶディズニー絵本や他のテレビアニメ、昔話や名作童話にアニメ調の絵をつけた「アニメ絵本」の源流がここに求められるのではないかと考える。

日本の画家のオリジナルな絵による最初の「絵本」は、戦後の混乱期がようやく落ち着いた昭和26（1951）年の小峰書店の『三匹のこぶた』である。小学校1、2年生を対象とした「小学生文庫」の「童話」としての出版で、「絵本」として刊行されたわけではないかもしれない。しかしこれはまさに絵本と言ってよいだろう。また、同年には版權を正式に取得した本格的なディズニー絵本も出版されている。絵本「三びきのこぶた」の出発点となった年である。

明治以降、日本の絵本の歴史は絵雑誌を中心として発達した。一方明治の終わりの「お伽画帖」や大正時代の「日本一ノ画嘶」、戦前の「講談社の絵本」（講談社、昭和11年より刊行、全203冊）など単行の絵本叢書も数多く作られた。だがその中に「三びきのこぶた」は入っておらず、本格的な絵本化は戦後まで待たねばならなかったのである。

絵本にはなっていないものの、「三びきのこぶた」はどちらかという、幼児教育の場で取り上げられてきたようである。上で述べたように、濱田廣介は幼年童話としてこの昔話の再創造を行った。また幼稚園向けの人形劇の脚本になるなど、幼児教育の場にふさわしい話として広まっていったのだと考えられる。また2点の紙芝居も「三びきのこぶた」の普及に大きな役割を果たしたであろうと思われる。だがこの背景にディズニーの短編映画があり、大きく影響を与えたことは否めない。

「三びきのこぶた」絵本は、1950年代以降、大衆的な廉価版の絵本での刊行が相次ぎ、幼児に身近な昔話となっていく。次報にてその全容の分析と考察を行う予定である。

付記

①本稿は、平成28年5月28、29日に京都女子大学にて開催された第19回絵本学会大会における口頭発表に大幅な加筆補正を行ったものである。

②資料は、平成28年3月本学文学部児童教育学科卒業の森彩香さんの調査を基に筆者が追加調査を行ったものである。ここに記してお礼を申し上げます。

③図版の掲載について、大阪府立中央図書館国際児童文学館、名古屋柳城短期大学、東京都立多摩図書館より許可をいただいた。ここに記してお礼を申し上げます。

〈主要参考文献〉(注に記載のものを除く)

藤本朝巳『昔話と昔話絵本の世界』日本エディタースクール出版部、2000
 谷本誠剛『『三匹のこぶたのお話』—昔話と児童文学』『英米児童文学ガイド—作品と理論』日本イギリス児童文学会編、研究社、2001

〈注〉

- 1 2016年7月9、10日に高千穂大学にて開催された
- 2 「保育要領—幼児教育の手びき—」文部省、1948
- 3 藤倉恵子「ハリウエルの「三匹の子豚」の文化史的読解(その1)—AT124話型の英仏類話との関連において—」『京都産業大学論集 人文科学系列 第49号』2016
- 4 Preface. Jacobs, Joseph. *English Fairy Tales*, Dover Publications, INC.
- 5 この情報は児童文学翻訳大事典編集委員会編『図説 児童文学翻訳大事典』大空社、ナダ出版センター(2007)による。筆者もこれ以前のものがあるか調査をしたが、現在のところ見つからない。
 本書の書誌事項を記載しておく。吉岡向陽、高野班山共編『家庭お伽話』第十三篇、春陽堂、明治41年(1908)、本文59頁、カラー口絵付き、サイズ22×15cm、左開き縦書き、8銭
- 6 「毎冊に日本のお話と西洋のお話とを載せます」との断り書きがついている。
- 7 本書扉に「李王世子殿下御用係村上菱山先生(口絵)」と記載されている。
 稲村露園『学校家庭講話資料 世界名作お伽噺』文陽堂(奥付けは富田文陽堂)、明治43年(1910)、高島平三郎序、村上菱山口絵、サイズ18.5×13cm、左開き縦書き、定価35銭
- 8 「子供之友 八月号」第1巻第5号、婦人之友社、大正3年(1914)8月1日、10銭
- 9 菊池寛編『幼年童話集 上』『小学生全集第一巻』文芸春秋社、昭和2年(1927)、270頁、サイズ22×14.5cm、左開き縦書き
- 10 濱田廣介編『ひろすけ童話と絵の本』飯沢天羊画、日本図書出版社、昭和7年(1932)、サイズ27×20cm、左開き縦書き、定価90銭
- 11 1930(昭和5)年に倉橋惣三監修『幼児のための人形芝居の脚本』フレーベル館が出ている。脚本を書いたのは、東京女子師範学校附属幼稚園の保姆である菊池ふじの、徳久孝子である。
- 12 「国産ミッキーマウス大行進」「別冊太陽 昭和十年—二十年 子どもの昭和史」昭和61年8月、平凡社、pp.126-127
- 13 福川祐司文『3びきのこぶた』表紙画平井紀生、本文画三石宏文、北山礼子、三石泰江、「ディズニースーパーゴールド絵本」講談社、2010
- 14 原作 イギリス民話、脚本 川崎大治、絵 福田岩緒『三びきのこぶた』(12場面)童心社、1986
- 15 「三びきのこぶた」の話そのものは鈴木三重吉『三重吉童話読本第一』明日香書房、1948、しまてるお『天がおこちてくる アメリカ童話集』世界社、1949の童話集に収録されている。
- 16 寺村輝夫 児童文学者1928-2006
- 17 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典 第一巻』大日本図書、1993
- 18 「コラム ディズニー絵本の著作権問題」『はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ』鳥越信編、ミネルヴァ書房、2002、p.75
- 19 石川晴子「日本の絵本、歴史的考察VI—占領下の翻訳絵本／ウォルト・ディズニー『白雪姫と七人の小びと』」『日本保育学会大会研究論文集(53)』(2000)
- 20 *Walt Disney's Three Little Pigs*, ill. by the Walt Disney Studio, adapted by Milt Banta and Al Dempster, ©1933, 1948, Random House Edition, 2004